

講演

文部省からみた広島大学

はじめに

もう座ったままで、ご挨拶も申し上げません。ご紹介をいただきましたとおりでございます。小池さん（小池聖一）の方から、講演骨子というのを五つ示されておるのですが、確かに広大の五〇年史ということから考えれば、大学紛争と広島大学はどうだったかというのは、大変大事な課題になるのですが、私の方からみますと、まあ、広島大学もその他大勢の一つということになるものですから。そして、昭和四〇（一九六五）年に大学局の審議官を担当しております、四六年から四八年までが大学局長でした。そして、四九年から五一年までは、学術国際局というところに行きましたので、大学そのものではなかったわけです。その後、事務次官を二年やって、さよならさせていただきましたので、ずっと広島大学にフォーカスをあててお付き合いをしておったわけではございません。したがって、その五〇年史に、どういうふう組織だった話ができるのかってというのは、ちょっと私自身に見当がつかないもんでございますから、結局、自分の歩ん

だことをお話しして、それがどういうふうに関係がでるかかっていうことかなというふうには、まあ、取捨選択していただく他はないなと思っております。

木田 宏

一、大学研究との出会い—国際大学協会第四回総会—

広高におりました関係上、懐かしい思い出はいろいろございますが、それは後回しにしまして、大学研究との出会いということについて、これは広島大学と無関係ではありませんので、それからお話ししていきたいと思えます。実は私は、文部省に入りましたから、地方行政の関係ばかりやっておりました。日教組対策課長という名称まで頂戴いたしました、組合との喧嘩相手の先頭に立っておりました。大学なんか全く知らなかったんですね。

それが、昭和三九年でございましたが、ユネスコ国内委員会の次長というポストを、これは比較的閑職と思われていたんでしょうね。広島大学の森戸先生が君ちょっと手伝え、というお話をされて、実は、

文部省の幹部に話をして、今度、五年に一回ずつ行う世界の学長の会議、国際大学協会の会議を昭和四〇年に開くことになったんで、その組織委員会の事務局長を君がやってくれ、というお話が舞い込んできました。で、私は、上司もそっち行つて手伝えつて言うもんですから、国際大学協会という、その当時、日本の加盟校はほとんどなかったんですね。森戸先生が、やっぱり広島大学におられて、早めに国際関係の場に出してらした。そして、アジアの理事をしてらしたんですね。で、五年にいつべんずつの会議だったんですが、日本の大学は世界の大学の動きを知らな過ぎるから、東京でその国際大学協会の第四回の総会を開くことになった。だけど、国際会議の世話をした人間もおらんから、おまえ来てやれということになっちゃったんです。で、私は、オフィスを安田講堂の中に作ってもらいましたね。それで、森戸先生が国公立のトップを皆それに向けさせようということで、その組織委員会を作つて。私は事務局長。それが初めてなんです。赤門をくぐつたのも初めてですし、大学問題というものの縁ができるつていうのも初めてでございました。しかし、大変幸いだったんですが、その組織委員会には、東大の茅さん（茅誠司）、大河内さん（大河内一男）。それから、後には、加藤一郎さんもそうですけれども。公立大学の永井雄三郎さん（東京都立大学総長・元公立大学協会会長）、私学の大浜信泉（早稲田大学総長）、それから京都の奥田東先生（京都大学総長）とか、学習院の麻生先生（麻生磯次）、上智の大泉先生（大泉孝）、財界では植村甲午郎（経団連副会長）というような方を森戸先生がお集めになつて、そこで会議をして、準備をされ

る。私がこの事務局長で座つて、なんとかそれをこなさんならんという立場になつて、初めて大学の学長先生との出会いができました。

そしてその国際大学協会が東京で討議しようとしたのは、第一目に大学の拡大。どこでも戦後大学が落ち着いてきたら、たくさん進学者が増えてくるという状況があるもんですから、大学の拡大という問題が一つ。それから、大学の社会的貢献。これが一番びっくりしたんですけれども、第二番目の柱。第三番目に大学の自治という柱がありまして。それについていろんな関係者が討議したものを持ち寄つてきて、総会で発表して、皆さんがご論議をして。そのペーパーは、かなりまとめたものとしてですね、この広大の図書館にも入つてはるはずでございます。私の書いた日本語のは薄いんですが、International Association of Universities IAUとっておりますが、その国際大学協会を取りまとめたレポートもきつちりとしたものができております。で、いつべんに学界のトップの学長さん方がいらつしやるるところにお話を伺うチャンスができたのですから、ははあと、いろいろと大学の気風というものを感じました。国立大学の学長さんは理想だけおっしゃつてですね（笑）。そこに行くところ私学の学長はですね、これでお金がどのくらい集まつて、どのくらいになるかっていう、理想がどのくらい現実になるかという尺度は持つていらつしやるわけです。国立大学の学長は、とことん理想論をおっしゃつておしまいになつて、金集めはこつちがせんとならんのかなあ（笑）、と思うことがあつたのですが。これは大変な世界だなというふうに思いました。

それで、その高等教育の拡大、大学がどういうふうに広がっていく

か、お手元の資料をちよつとみていただくと、昭和四〇年ですから、一九六五年ですね。ちよつと昭和三〇年からの一〇年間、一九五五年から六五年にかけて、各国とも戦後平和になって大学への進学率がどーっと増えていく。高等教育の拡大という問題をどうやって受け止めるか。で、その拡大をする時に、大変大きなレポートがIAUから出ております。私、その中で一番注目いたしましたのは、アメリカのように中等教育と大学とが、まあちよつとつながってるっていいですか、六・三・三・四と日本式にいくのもありますが、八・四でいくのもあるけれども、中等教育と大学とがすーっと寸胴のようにつながっているところは、進学率が高いですね。そしてドイツやヨーロッパのように、普通教育から今度は大学教育へというところで、大変大きな段、切れ目がある。ははー、これは歴史的な経緯で、これは二つになつてるなと思ひました。で、専門学校があつたりなんかして、そしてエリートだけが大学に行っているという。中学校で選抜してるところは、大学での進学率は低い。こりゃまあ、考えてみれば当たり前のことですが、そういうのが、各国のデータで出て参りましたね。で、各国での大学の現状を比較してまとめたフランク・ボウルズという人の書いた「高等教育の拡大」(Access to Higher Education I. II. unesco 8 IAU 1963)をみて参りますと、これからは一人でも多くの人が大学まで行って、要するに知的能力を開発するということが社会のために意味が大きいんだと。だから積極的な拡充策をとるべきだというレポートだったんです。そのとき出てきたレポートはですね。で、私もいろいろ考えながら、そういうことかもしらんと思つておりました。

それから、先ほど申し上げたように三つのテーマがあつて、そのテーマについてそれぞれかなりのレポートが出てくるわけです。それで日本から参加する学長さんのために、森戸先生は、特別に日本でやることだから、この際、国立も私立もキーになる大学は入ってください、それ以外のところは無理に国際大学協会に加盟しなくてもいいけども、出席はさせてくれるというお願いをしますね。日本からは五〇大学が出て、世界各国からあと大体三五〇ぐらい集まりましたから、四〇〇ぐらいの大学が集まったんですね。で、日本から参加する人のためには、どうしても日本語でペーパーを作っておかんにゃいかんと思つて、初めてそういう大学についてのペーパーを翻訳させてもらいました。もちろん私一人でできるわけじゃないから、東大の中で言葉のできる人に来てもらつてやりました。斉藤真先生という政治学の先生、それから、前田陽一先生の二人。私は役人ですから、アカデミックな世界とのつながりって意味では、そのお二方を東大は用意してくださいって、それで安田講堂の中に事務室を作つて。そらまあ、通訳から何から大変な手順ですよ。物事を始める時にはいろいろとありますね。国費をあてにできないんですから、通訳を安く連れてくるか。なるほど、えらいこつちやなあと思ひながら、仕事をさせてもらいました。

そこでその三つのテーマなんですけど、第一のテーマは、各国とも拡充策をとっている。中等教育と大学をストレートに持つてきたところが、たくさん人間を抱える大学になる。大学と言えるのかという問題が起こつてきますけどね。そういう方向をとります。第二番目は、

大学の社会的貢献というセッション。これは実際にそのセッションに行ってみて、あー、どうしようもないなと思っただんですが。各国ともそういうことかというところ、開発途上国から援助してくれとか、いろんなところで大学の先生を招いたり、いろいろやってるわけですね。で、大学の拡大って問題なり、その大学の学術研究っていうことについて、歴史の古い国々の援助を貰おうとしている。そこに列席された日本の学長はね、一言も発言の余地がない。まあ、自分のことで精一杯なわけですね(笑)。人の大学がどうなってる、よその国の経済とそその大学の発展がどうなってるかって、考えたことがなかったんですしね。そのペーパー読んで、自分ところはこういうふうな社会貢献してるなんてことを言う学長は、一人もいらつしやらなかった。実は広島とインドネシアとの間で深いつながりができたというのはそういうところから起こってる。ですから、これは日本の大学ってのは、確かに日本の中だけでいばってることじゃあない(笑)、私の感じたこととしてね。これ、社会にサービスする、よその国にサービスをして、いろんなことをやるんだっていう。

これは、だいたい時代がずれとるな。まっ、脱線ばかりしますけども、タイのチュラルンコンに行った時にですね、アメリカの学者がいつばい来とりました。昭和三十九年ですか、ユネスコ担当した時に、チュラルンコンに行ったんですけど。そして向こうの学長に会って、「たくさんアメリカ人の顔が見えるけれども何やってるんだ」って言ったたら、「あれは大体工学をやっとるね」ということでした。で、工学なら日本でももうちょっと手が打てないこともないなと思って、「いやいや

日本だつてねえ、ご協力する道があると思うよ」って話をした時のタイの学長の返事が、私も忘れられないんです。「もし日本でやってもらうんだつたら、アジア研究をやって欲しい」。で、これに参ってねー。そのアジア研究ってのは、これまた手薄ですわな。だけでも中近東から何からっていう、ああいう古代の研究をしてらつしやる人は確かにすばらしい。ですから、タイのチュラルンコンの学長だつて、「日本はそういうことの研究について、かなりしつかりしたものを持っていくから、日本で学ぶんだつたら、わしらはアジアなんだけれどもアジアを知らないんだ。アジアのことを知りたいから是非頼む」と。そう言われますとね、今度はアジア・中近東っていうのはどうなっているのかということについてはね、これはこつちがちょっと待ったつて言わないと、どういう先生がいらつしやるか、僕すぐに思いつかん。だけどそういう国際的な大学が協力するという意味についてね、私もユネスコだとかなんとか出入りしたもんですから、私は深く感じました。これは、日本の大学全然いかん。

三つ目が大学の自治ですね。大学の自治っていうのはね、日本では教授会の自治だけを言うつたわけですね。そして教授会が勝手に決めるつてことが大学の自治だつて、こう言う。それでお巡りが入つてきちゃいかんとかつていう。それは、最高裁の大法廷の判例まで出るほどですから、日本にとつては大問題かもしれんけれども、彼らが議論している大学の自治っていうのはなにか。社会の発展に向かつて大学はどうしてんだ、という議論になつてるんですよ。皆さんが集まつて議論されるのはね。いや、これもいかんと思ひましたね。これは、

全くずれとるわ、日本の大学は。そこで昭和三九年に一年間、ユネスコの仕事をしながら、東大に入って安田講堂でその国際会議の準備をしながら、そして、まあ何とか、指導的な学長さんのご指導を受けながら国際会議の準備をして、まあまあ無事に、昭和四〇年の八月三日から九月六日まででしたかね、一週間ほど東京で会議をやりました。で、まあ、ホツとした。そのために安田講堂は全部整備したんですけど、その後、全部が大学紛争で安田講堂はめちゃくちゃになりましたけれどね(笑)。まあ、その経験が私を大学に引っぱり込んだんです。

二、大学研究に着手

こんなことをしてちゃあどうにもならんいうんで、最初に始めた事は、幸いそこで国立・公立・私立の主立った学長さんについてペンにご昵懇になったもんですからね、次に学長になるべき人を集めて、教えを請うた。そして大学研究を始めなければね、大学について書いた本なんて何にもない。だから、大学研究を始めたい、というので、岡野さん(岡野澄)っていう審議官の仲間がいて、「これは学術のことだ、おい、科研費よこせ」って。そしたら「おまえにやるわけにはいかん」と。で、中村元先生(東京大学文学部教授)をキャップにしてですね、この大先生の子分を集めた。国公立を集めてね。そして将来大学のマネジメントをやるべき人に、文部省の少し若手も加え、いろんな人を加えて、そして大学研究を始めようとした。そして早速、その国際大学協会の会議が終わった直後から、大学研究を始めました。

で、これは、大変役に立ったんですね。ある意味で私は世の中に貢献したと思っただけでも、その大学研究の場をIDEに持って行ったのです。IDEっていうのは、民主教育協会っていう名前の如く、社会教育をやったり、初等教育をやったり、もったいろんなことやってたんですね。しかし、どっか核にして大学研究やって貰わんと困るなと思ったもんですから、民主教育協会のミヤザキさん(ミヤザキ・ヒロシ)っていう人に頼みましてね。ちょっと大学研究の場をあんた世話してくれって。そして科研費を貰ってきて、合宿討議をしましょう。その科研費も、中村元先生を担いだからといって、東大に持って行っちゃ困る。IDEに金を入れてくれ。で、IDEで本を買ったんです。いっぱい本を買いましたね、若い人たちにこれ読んで、この本はどういうことを書いてある本だって、毎月何編かず紹介しろって。それが、IDEの大学問題研究資料(「IDE大学教育国際資料」というので、これも図書館に入っとるはずですわ。四〇五年になりますかね(「IDE大学教育国際資料」は一号(昭和四二年一〇月)三〇号(昭和四五年三月)発行)。毎月一冊ずつ位、若い連中に集まって勉強してもらった。実は、広大でお世話になった喜多村さん(喜多村和之)は、その中の一人だったわけです。

で、少しその研究しながら、だいたい外国のいろんな大学の動きを勉強した後で、日本の大学を誰か研究する人がいないと困る。日本では、教育学部っていうのがあっても、小・中学校のことは理屈をいうところが、大学のことについては誰もものを言わないわけですね。だから、今度は、東大出版会の応援も得ておったもんですから、「一つこれだ

け先生が集まってきたわけだ、ちょっと名前のある人に日本の大学論を書いてもらいたい」って言ったらね、みんな逃げたんですな（笑）。紛争の前だったけれどね、「いやー、それは難しい。木田君、日本の大学について論評を書けなんて言ってもね、それはちょっと勘弁しろ」って（笑）。ヨーロッパの方の勉強しているのが精一杯だ、とこういうことになった。そのうちに紛争ですよ。大学紛争になっちゃった。で、私はまだ大学局は担当しておりませんから。社会教育を担当しておったり、体育を担当して、紛争の時は体育を担当して横つちよから見えておったわけです。だけでも、そこで活躍される方々は、国際大学協会という森戸先生のご注文があったために、大体お顔見知りになっておったというのは、私がもう大変助かった。

三、大学進学率上昇への対応

そのうちに、大学局を担当しろということになったんですが、大学局三年、学術局三年おりましたから、六年間大学とのご関係ができたわけです。で、私自身は大学問題についてそういう事前の勉強会、ディスカッションをしてました。広島の人が入っておられませんでしたが、広島にいられた喜多村さんのような若い方もおられて、東大の先生は中村元先生しか顔を向けてくださらなかった。東京教育大学、これは筑波への移転という問題も関わっておったんですけども、学長になられた方々など（福田信之・宮島龍興ほか）に積極的に参加してもらって、慶応からも早稲田からも入ってもらって、皆さんで勉強し

てもらいました。そうして、IDEの高等教育研究ついでこのをずつと出してきた。

その頃にですね、これは広島に縁がある池田内閣ですが、池田内閣つてのは、昭和三五年くらいからですかね。池田さんが総理になって、そして大来佐武郎氏が総合計画局長に。人作りついで池田さんがおっしゃったわけです。それは、日本の経済発展を、昭和三五年の暮れに所得倍増計画ついでのができたんですけども、昭和三六年から約一〇年間でですね、所得を倍増しましょう。で、ハガチ事件とかああいう殺伐とした事件の後、岸さんの後を継がれて、池田さんが総理になられて、それ政策転換だつて。で、今のままでやったら、日本は一次産業で平和に飯を食うなんてできもしない。だから二次産業・三次産業へどんどんシフトしていく他にないんだ。これだけ海外からたくさん帰還者もかかえこんで、どうにもならないじゃないか、という動きが所得倍増計画になってきたんですね。で、まあ、戦後ようやく脱したという時期に来たもんですから、あつちこつちに、お医者足らんとか、情報の専門家が足らんとか、いろんな問題で所得倍増計画で理工系の拡充ついでのことを、かなり積極的に文部省は算盤を弾いた。そういう計画は一方進んでおったわけですね。ですから、ちょうど昭和四〇年に国際大学協会が来た時にも、大学の拡大という問題は日本自体の問題として整備を進めておった課題だった。だから、これは話になる。そして、森戸先生が昭和四二年から中央教育審議会の会長になられて、大学をどういうふうに整備・充実していったらいいかという問題に関して、四六答申という大きい答申をお出し

なられた。その答申を考えるベースに、大学の進学率のアップということが基本的な社会の動きになつてゐるわけです。

で、念のためにちょっとだけこの表でどういう動きになつてゐるかということをお考えいただきたいので申します。昭和二五年、「進学率1」つてのは幼稚園です。「進学率2」つていふのは高等学校。で、「2」つて書いてある四二・五%つていふのは、昭和二五年の高等学校への進学率で、男女合わせた平均です。で「F」つて書いてあるのは女性だけの進学率です。そして「進学率3」つていふのが、大学・短大への進学者の率であります。そしてこれは、男子と女子に分けて、この進学率をとつてあります。「進学率4」つていふのは、大学院でございます。「M」は男子ですね。そして「進学率5」つていふのが、各種学校が変わつた専修学校なんです。で、大きな点だけご覧にいただけますとね、何でも数字が並んでゐるようには見えませんが、その進学率は、経済の発展、社会の発展と共に発展し、上昇する。幼稚園が六〇%で止まつておりますのは、保育所があるからなんです。一〇〇%なんです。この六三とか、六四つていふのは、大体一〇〇%。で、高等学校は、ご覧のように戦前三六%、昭和五年の三六%。これが、ずーっと伸びていきまして、そして昭和三五年からベビーブームの山が来る時に、ずーっとやはり進学率も高くなつてくる。これがまあ、戦後の、その、ベビーブームが教育界を大きく動かしてきた原因になるんですが、それがどんどんと、九割まで高くなつてますね。で、その中で「F」つていふのがですね、実は昭和四五年から、平均よりも女子のほうが高くなつております。この時に女子大、女子

学生亡国論つていふのが、大学から起こつたわけです。大学に女性が入つてきて大学がだめになるといふ。これが昭和四五年なんです。

その時の大学への進学率は、二三・六%。これからだんだんだんだん、男子よりも女子の進学率が上がつてきます。で、一方男子の進学率は、昭和五〇年に四三%になつたのに、それからずーっと男子の進学率は四三%にならない。平成七年まで。それは何故かつていふとですね、私は、とにかく大学への進学は広がるほかないんだから、どんどん拡大して受ける、という政策をとつたんです(笑)。それはわずか私の在任中、わずかの時であつて、後はみんな、いや財政赤字だ、大学はそんな誰でもが行つて遊ぶとこと違う、という話です。昭和五〇年に抑制策をとつたんですよ。昭和五〇年に男子の進学率は四三%、女子は三二%となつた。ところが、抑制策をとつたためにですね、進学率は男子がぐーっと下がつてきて、女子は受験に強くなって、どんどん進学しちやつた。

で、この大きな社会的な動きつていふものについて、文部当局が本当に対応したかつていふと、対応できてません。これは、皆様方が経験のベビーブームが押しかけてきて、大学が急増した時にですね、受験生がいっぱい来て、振り落とすのが嬉しくつて、精一杯だという。私学はそれで儲けるといふ時なんです。ですから大学には誰も彼もが来るものじゃないよつていふことで、入試の問題とか何とかくしゃくしゃになつてきたのが、この時期なんです。これは、やつぱり世の中の動きつていふものに対して、大学つていふのが対応できていなかった。実は戦後、学制改革で間違つたのは六・三・三・四の四だつ

たんですね。戦争に負けたもんだから、専門学校に大学っていうレッテルを貼って、そして旧制帝大をみんな一年格下げしちゃった。私は、これが戦後の教育改革で最大のマイナスだったと思います。

そこへ向かって何故こういう動きになってくるかというのと、それ皆さん、お分かりのように、今でいえば当たり前の話で、少子化なんです。我々の時には兄弟五人ですから、長男と次男だけ学校行って四割。ところが今は一人。場合によれば、長男長女二人。一〇〇%にならないなきゃ、止まらないですよ。社会のエネルギーマンというのね。で、勉強できないのが大学に来るのは馬鹿だって。そうしてみんな、早く卒業した方々は、自分らは頭がよかったというようなことを言いますけれどもね。その当時どういふことを知ったかというのと、それは、息子に企業の跡を継がすためには、どうしても大学に行つてないと自分の跡を継がすわけにはいかん。日本の大学は三割ほどはじき出すんですから、とても入れないからって、アメリカの大学に息子をやった事業家はたくさんおるわけです。事実、進学率が一番きつかった時はですね、アメリカへの日本人の留学生はうんと増えました。で、そういうふうにしなないと、自分の事業の継承ができない。そういう問題が起こつてくるわけです。同時にそれは個人の企業を継ぐだけでじゃなくって、お医者さんの跡継ぎも起こるし、新しい情報化もあるし、いろんな新しい世の中の動きに対して、大学は対応していかなきゃならぬんですね。この昭和五〇年からの大学急増に対して、文部当局も含め、日本の財界も政治家も経済界も、大学は頭のいい子が勉強するところなんだと、遊ぶために大学を作るんじゃないって、渋いことを

言つて。で、技術を勉強するんだつたら、この「進学率5」の専門学校で勝手にやつてりゃいいじゃないかって。これはねえ、私からいえば、国際大学協会で世界の動きっていうものを聞きながら、日本の大学はもうちょっとこつちに持つてこなければならんなど、感じてた者からしますとね、力がなかったといひますかね。多くの人の理解を得ることができなくて、女子大亡国論、女子学生亡国論から始まつてですね、大学は余計なものばかりできるといふ、そういう批判の中で、大学の拡充をどうしたらいいか、大学研究をどうしたらいいか。ちょうど昭和四〇年半ばから昭和五〇年ぐらゐまで、担当しておつたということなんです。

で、そこへ引つ張り込んでくださったのは、森戸先生でありまして、実は期せずして森戸先生は誠之館での先輩でもあつたわけだから（笑）、あーこれは広島にご縁があつたのかなーと考えざるを得ないですけどもね。そんなことで、お手元に資料に挙げてありますように、多少私書いたりなんかしているものつていふのは、大学に関わることが多くなつてきた。カーネギー財団から出している高等教育の叢書みたいなものも引つ張り込んで読みました。で、これだけの研究がどんどんどん向こうでは出ておるのに、日本の教育学部は大学のことは全く考えてくれない。で、大学について批判的な調査をし、メスを入れようとする、みんな、ちよつとそれは待つてくれと言つてね（笑）。お偉い人までおっしゃるわけだからね。まあ、最近こそだいぶ、玉川大学の出版部とか、東大出版会から、大学論が出るようになりましてね。三〇年かかつたかなーと思ひますけれどもね。大学

論っていろいろを興してもらわなきゃならんという気持ちだが、私の担当の時の考え方でございました。

四、新構想大学について

1 広島大学大学教育研究センター

それで、新構想大学とはどういうもんじゃ、という話があるのですが、私は、大学は勉強する人を大人まで含めて、どんどん入れてくるところが大学でなきゃ、だめだ。社会がどんどん進む、その社会の進み方に本当は先回りしてたいんですけども、教育っていうのは人の真似事から始まりますから(笑)、どうしても人が先に行って、こつちが後から行く。そうすると大体いつの時代もですね、何をしたらんだ大学は、文部省は何をしとるんだ、さっぱり今必要な学生を教育してくれんじやないかと、こういうことを言われますけれども。これはまあ、ある程度しよがないですね。まず、その先輩達のやってきたところに追いつくというのが基本的な要請で、それから先、どこに行くかっていうのは、それは、できる人が走るっていうのを邪魔しないようにするって以外に方法がないですね。

ところが日本は、走る人の邪魔をするんですね。例えば、広大に大学教育研究センターっていうのを作った。これは飯島さん(飯島宗一)がですね、大学紛争の中で、これは大学研究をやらにゃあいかん。だから大学センターを広島に作るから、一つ予算でも面倒みろとおっしゃって、私は喜び勇んで広島に大学センターをつけましょう。そし

たら、この広大につけた大学センターでは、広大のサーベイはできない。残念ながら。広大がどうなっているかっていうことをサーベイしようとする、新参の、なにかよそ者が来て大学センターでつて(笑)。関先生(関正夫)もおっしゃってましたけれどね、全然、拒絶反応。一つ助かったことはね、文部省はOECDっていうところに加盟して、大学論とかいろんな議論している。そうすると日本の大学がどうなっているかっていうデータがいるんです。ところが、大学紛争の直後だったもんだからね、文部省で大学に調査票を配ろうとする、これまた握りつぶされちゃう。その時に役に立ったのが広大のセンターなんです。広大のセンターで大学のサーベイをやってくると、まあまあ日本の国公私立の大学が対応してくれた。だから、関先生や、横尾先生(横尾荘英)や、喜多村さんには本当に感謝しなければいけません。国際会議に行った時に、政府が大学のデータを持ってるっていうのは、広島にセンターができたおかげなんです。で、これは、広大の飯島さんの趣旨とは違っちゃったんだ。飯島さんは広大をどうするかっていうのにセンターを作つてね、そしてサーベイをして、それでみんなの意見を結集してこうしようというふうに考えたのに、それはできなくて、文部省の手伝いをしてくださった、っていうのがセンター。だけでも初めてセンターに大学論の本が何冊かあそこへ集まったんですよ。

で、そのだいぶ前でしたかね。今日ここでみてたら、皇先生(皇至道)の写真があったから、あーそうだと思いましてね。広島に来てね、「日本の大学は困ったもんですねー先生。大学研究っていうのは

一つもないですなー」って言ったたら(笑)、皇さんがね、「いやいやちょっと待った」って言ってね。ご自分の大学の研究って本(「大学制度の研究」)を持っていらした。「そら、やってるよ」っておっしゃったからね(笑)。「あーすいません」って言ったんだけれど。そりゃまあ、皇先生が一人でやってらっしゃった、っていうだけでね(笑)。戦後の大学を動かした議論にはならなかったですね。そう言っちゃ申し訳ないけども。だけでも広島の方にはいろんな意味でそういうふうなお手伝いをしていただきました。

2 研究と教育との分離—法学教育への提言—

で、ちょうど新構想大学って言う時に、大学を新しくこういう方向に持って行かなきゃならんっていう時にね、大学はたくさん作るものではないと言いながら、どうしてもこれはいるって言い出したのが、医科大学。それから、もう一つは情報の理工系の大学。ですから、国立大学は理工系だけ作れ。ペーパーブームでその他受験生いっぱいのは、社会系は私学が作るから国立は作るな。これはまた、閣議の席でそういう喧嘩が起こるんですよ。私はね、そうでなくとも日本の国立大学というのは、理工系偏重であって、戦前のまともな法学部というのは東大と京都にしかなかったわけですから。あとは、法学部でしかなかったですね。法学部がいいかどうかというのは後でまたお話を申し上げますが、社会科学が国立では弱いんです。で、自然科学が強ければそれで研究がどんどん進むという面はもちろんあります。だけでも、その新構想っていう時に、お世話をしながら私はこ

れはいかんかって思ったのはね、大学は教育・研究一体であるという議論なんですよね。こんなことね、国際大学の集まりなんかでは言っていない。学生を一方でいっぱい入れならん時にね、研究と教育が一体だなんてことをいったら、研究はどうなりますか。

だから私は、やめてから大分経ってのことですが、法学部長が集まって、法学部長は大学の中で一番格式をもった学部長さんなんです。だけれども、先生方には申し訳ないですけども、あなた方は中学校の校長さんですよって言ったんだ(笑)。今、法学部で握っている学生はね、戦前の中学校よりもっと程度が悪いと考えないとしようがない。それがね、日本で一番優秀だなんて言ってもらったら困ります。で、もう少したくさん入れてくれなきゃならん。ちょうど一〇年、一五、六年ほど前でしたかな。三日月さん(三日月章)が、「木田君、君の言うところ、法制審議会で思いつきり言え」とこういうわけで、三日月さんに呼ばれて、私が司法試験の改革委員会になって、司法制度調査会に入りましたね。「世の中がこんなに大きく変化し、国際化し、商取引が国際化している時にね、司法試験の合格者っていうのが、戦後決めた五〇〇人の枠から上に出てない。そんな馬鹿なことありますか。二、〇〇〇人あっても当たり前ですよ」って、言ったんだよ。そしてどういうことになってるかという、中央大学にしろ、東大にしろ、司法試験を受けるための予備校に行つとるんです。法学部に行つてない。中央の法学部長さんに、「あんたんとこどのくらい予備校にいつとるだ」って聞いたたら、ほとんど全員だねってこうおっしゃる。東大でも半分は行つてるっていう。何をしとんなー、それ

じゃー、そういう変化に対してちょっと疎すぎますね。で、私は、二〇〇〇人っていつべんに言ってもしょうがないでしょうから、せめて一、〇〇〇人にしなさいって言って、最近は一、〇〇〇とか、二、五〇〇とかいう声が聞こえて来るようになってきたから、やっぱりそこまで来よるな。国際社会で商取引をする時に、日本は弁護士がいらないんですよ。みんな外国の弁護士を頼まなきゃならん。なんということだ。

脱線ばかりして、あっち行ったりこっち行ったりして(笑)、広島には来ませんけど。要するに、大学論というものについて私自身は、ムカムカムカカしながら見とったわけです。で、みんな大学の自治だとか何とか、教授会の自治だとかおっしゃってくださってね。全然、社会の動きに対して大学がどう対応すべきか、国際化に対してどう対応すべきかということを考えてくださらない。けれども、役所の中で全員が私のように考えているわけじゃないんですから。私は自分の在任中、法学部っていうのは作らさん、こういう信念でね、新設の法学部は全部潰しました。それは何故か。それは我々役人が法学士をみててね、あるところで決めたルールから外れないように、という思考方法しかとらない。役所の若いものを入れても。そらあ、中にはできる人がいて、それを越えて、どういうふうに進展するかってことを考えるのがありますよ。だけど各省でやってみるとね、「こういうルールになってるから、木田君、そらいくら言ってもだめだよ」って、こう言う。で、法学士がねー、過去に決めたルールを記憶しとってねー、それから外に出ないような、それが日本のリーダーだったら減りますよ。で、僕は、こんな法学士作る必要はない。で、法律と政治とをこっちゃん

してね、一緒にしてるってのもおかしいんだ。政治学っていうのは、これは社会学に近い系列のものであってね。法律っていうのは規範ですから、過去に作った規範を厳守していく。こないだのエイズの訴訟で、おかしいと思う人は多いかもしらんけど、法律はそういうもんなんですね。世の中からずれたところに規範があつてね、その規範を守るのが司法であり、裁判官なんです。それは、世の中よりも、先に法律が動いたらね、そら、危なくつてしようがない。そんなものは独裁者の国です。だから、世の中の進歩に対して、裁判所の出す判例っていうのが、少し遅くなるっていうのは当たり前で、それでこそ社会の安定が保たれる。すつ飛んでいったらどうにもならんですから。ところがね、その、古いことを墨守しようとする法学士しか世の中のリーダーに出てこないっていう日本の大学のシステムっていうのは、本当に具合が悪いですね。で、私は、法学部は自分の在任中、何も公言はしませんよ、だけど、筑波作る時も法学部は無し。いりません。こういう学部はいらないっていうんで。筑波は、江崎さん(江崎玲於奈)が学長になった時に、「木田さん、どうしてあなたは筑波に法学部を作ってくれなかった」って言いに来ました。いらん。大体日本を悪くしている(笑)。自分が法学士だから言いますと、そういう発想ではだめなんだと。

3 研究所の位置づけ

といって、筑波がよかったかどうか、それは分かりません。新構想の一つですからね、筑波も。けれども、大学院とね、研究と教育が一

体だという。そういう明治の初めの議論でね、戦後の大学を議論したってどうにもならんのですよね。中学校と同じくらいにたくさん進学してね、義務教育と同じようにたくさん来ている学生とね、大学の研究が一体だなんて言ったら、ナンセンスです。だから当然、研究は研究で切り離さなきゃいかん。勉強する人は、勉強してもらわなきゃいかん。だから、新構想という時には、共同利用研っていうものを私はたくさん作りました。研究所が学部よりも格が下にみられておった。研究所はそういうもんで、学部の先生が格が上で、学部の教授になれなかつたら研究所に入るという手順で、回ってましたよ。で、そんなじゃしようがない。研究所こそが、先端を行く研究をやってもらわなきゃいかん。学部は教育を熱心にやってもらって、学生が少しでも平均のレベルが上がるようにしてもらわなきゃいけない。そんなことで新構想を考えましたから、新しい研究所をだいぶ作りました。

4 広島大学総合科学部

そして、新構想というのは、大学院を中心してものを考える。戦後の間違いをここでなんとか直したい。大学院を中心に考えたい。で、そこが、実は広大の総合科学部に若干関係があるんです。大学院を中心にして考えるのだが、今のような高校からすぐ学部に入ったんでは、これは専門学校だ。それじゃあだめだから、東大に一つしか残ってないし、あれも中途半端なんだけれども、なんとかリベラル・アーツというもので、きちっとした基礎を持って、そしてどこの大学院にでも入れるような基礎を作っていきたい。いわば、旧制高校の復活ですね。

それをやるうではないか、とこういったのが、広島島の移転の時に起こった話なんです。

で、幸いに私の後任者であった井内さん（井内慶次郎）までが、同じ広島であって、井内君は根っからの広島人ですからね。一生懸命になつて、広島をよくしたいと思った。で、私は広高ではあるけれども、あつちこつちうろついて回って、広島だけにこだわっているわけではないですけども、ちょうどいいと、これは。大学院の重点化を考えなきゃならん時に、今のままで大学院にしたら、専門学部があつて、要するに旧制の専門学校から大学院という形だけになっちゃう。で、それじゃ、どうもならん。それじゃどうもならんから、広島で総合科学部って話ができた時に、これを一つ強いものにして、総合科学部から、文理は大学院だけ、という方向にもっていく。そこを考えながら、あんまり大きな声でその先の話を言えませんがね（笑）。飯島さんとやなんかは、広島総合科学部に力を入れよう。今堀先生（今堀誠二）も事柄をよーく理解してくださってね。総合科学部を作ろうとやつたんですよ。それは、結局大学院というものを、しっかりしたものにしたから。ところがね、なんかこのメモがあるようですな。僕は知りません。僕がやめてからのメモだから、「井内メモ」っていうのがあつて、なんか皆さんのところ回ってるっていうんだな。井内君は、「俺は書いてないよ、知らんよ」って言っちゃいましたけど。それは、ちゃんと井内君の手伝いをしてくれた大学課長（大崎仁）やこないだ次官をやめた佐藤さん（佐藤禎一）が、書いてくれたらしいんだけど。ところが、大学でそういうことが起こるとね、もう、ジェ

ラシーの固まりになるんですね。一〇年ほど前にある理学部長さんにお会いした時にね、「大体あなた方は、総合科学部をよってたかって潰したでしょう」って言った。「理学部を早く大学院にしたいと思っただから、総合科学部に海外から立派な人を呼んできて、そんなありきたりのちゃちなものではない、すごいと思うような総合科学部を作ってくれ、というふうにやったのに」って言ったら、「そんなこと考えていらしたのですか」って、まあ、びっくりしたようなことを言っただけです。だけでも総合科学部には、要するにリベラル・アーツ。で、それをきちんと身につけて、本当に高度の専門に進んでいける人を教育して欲しかったんですね。これからだって遅いことはいけませんから、私は、そこは皆さんに頑張ってもらいたいものだというふうに思いますが、私の後任者は、「総合科学部を駒場のように二ヶ年で中途半端なものにしちゃあいかん。もつと旧制高校が今日はこんな姿なんだ」というやつを、広島でちょうどいいから作ろうと思ってやるんだ」と言っただけで、私以上に力を入れてくれたんです。

それで、このキャンパス、これもですね、井内君が頑張ったんですよ。あの人は官房長にもなっておって、で、百万坪を絶対に譲らなくて言っただけで頑張ってくれた。この土地をね。だから、井内さんは、その後、広島市立大学だとかいろいろなところを一生懸命になつて育ててますけれども、この広島大学っていうものをやはり、旧制高校からの想いがあって、一つよいものにした。八ヶ岳の一つって言って、八番目だなんてことを考えていなかった。そのトップに持つていて、幸いに遅れたやつを回れ右したら一番になる、というぐらいの勢

いでね、ここをよくしたい。だから、その総合科学部に大学院をつけてくれて、私もびっくりしましたな。ドクターまでばーっとつけてくれたね。びっくりしたな。で、それがまた、いじめの種になったのですな(笑)。だから、そこは文理大とか広大とかなんだ。高等工業とかいろんなあれがあるのかもしれないけれどもね。もう一寸、日本の大学っていうものを広い目で将来に向けて、こうみていただきたい。考えていただきたい。そして、今どうすることが、本当に大事なのかっていうことを考えていただきたいと思えます。

おわりに

法学部についてはね、私自身の法学士としての経験で、それを申し上げただけでも、東大がね、法律と経済を割っちゃった。森戸先生がね、あれは馬鹿なことだったなあというふうにおっしゃってました。で、やっぱりね、学部の格みたいなのがなくて、法学がなければ法学でないというようなイメージが残ってますけれどもね。法学っていうのは、そら一番古い学問であって、法哲学なんかをおやりになつた先生方、ご立派な人がたくさんいらっしゃると思えますけれども、先ほど申し上げたように、現実の動きに対して、末広蔵太郎先生のように弾力的に対応する先生ならば、問題ないんですけどね。皆さんは、どうしても裁判官になっちゃうですね。裁判官は世の中の秩序からすれば、前へ進んでもらっては困る。そんなことやられたら、世の中安心できません。ですから、裁判官の発想と、これから事業を起こして

いく仕事、ベンチャーを起こしていく、将来の日本がどっちを向くかっていうことを考えていく、そういう学問というのかな、これとはちよつと違うというふうに思うんです。で、森戸先生は政経学部っていうのは、一つになっている方がよろしいってことをおっしゃってた。だから、せめて私も、在任中はそれを守ったんですが。ところがどうしてもね、法学部の先生は、独立したくなるんですね。どこ行ってもそんな現象が起こる、起こってるんです。だけでも、もうちよつとやっぱり、法学は法学なりに日本の社会というものを考えて、その将来の動きをどうするかってことを考えて欲しいし、政治っていうのは、今のようない政治を大学が作って下さってんじゃないか、どうもならない。まあ、大学が作ったものとも思いませんけどね。しかし、だいたい早稲田はあれで品を落としましたね(笑)。そら、政治家の養成を心掛けてきたけども、どうしようもないですね。やっぱり哲学が欲しいですよ。

で、戦後の六・三・三・四の四に反対されたのは、小宮豊隆(東北帝国大学教授、学習院大学教授)と天野貞裕先生(京都帝国大学教授、文部大臣)なんです。「君、そんなことやったら、大学が専門学校になっちゃうよ」っていうことを、戦後の六三制の議論の中で、刷新委員会の中で、「だめだ」っていうことをおっしゃったのは、その人文のお二人です。で、僕は、やっぱり南原さん(南原繁)がちよつと調子よく行きすぎたんじゃないかな、と思つてますけどね。だから、戦後五〇年、大学こそ、変えなきゃいかんです。他は自然に底上げしてきて、いろんなことが必要になつてくるんですから、いいんです。と

ころが、日本の大学だけはね、戦後切り下げをやって、そして現実の動きと逆になっちゃった。で、そこをね、皆さんに、考えていただきたいなど。で、新構想と言ったのは、なんとかしてそういうことを少しずつ変えていきたい。研究所は研究所で、大学院は大学院で、どんなと走って欲しい、というのが新構想だったわけです。まっ、それで、後は、皆さんのご質問なり、なんなりで、お答えするようになりますかな。いいですか。

質疑応答

(小池聖一) どうもありがとうございました。先生は『大学への期待』、あるいは『学習社会の大学』という主要著書をお持ちで、大学院に関しても、今日のお話をたくさんいただくことができまして、非常にありがたく思います。フロアから、もうほんとに、広島大学五十年史というような形をちよつと外しまして、いわゆるこれからの大学という点も含めまして、ご質問なりしていただければと思いますが、どなたかごさいませんでしょうか。

(羽田貴史) どうもありがとうございます。私、羽田と申します。先生がさつきおっしゃった大学教育研究センター、今は高等教育研究開発センターと名称が変わりましたが、そこに勤めております。それから、先生が国立教育研究所の所長をされた時に、マーク・T・オアさんを日本にお迎えした時の、あのシンポジウムというカレセプションにも私、出ました。寺崎昌男先生と一緒に仕事していたもんで

すから。で、先生その時と全くお変わり無くお元気でなんで(笑)。
 それで、国際大学協会とその後の文部省の高等教育政策の国際的情報ネットワークという点でお聞きしたいんですけども。国際大学協会からの出発点というのは、非常に興味深いお話で。ただ、七〇年以降の高等教育政策と国際的な情報とのリンクをみると、むしろ、OECDとユネスコの方が強いですね。

(木田) そうです。

(羽田) OECD関係が強いという気がしているんですが。

(木田) そうです。

(羽田) そのへんは、OECDに加盟したあたりからそうなったんですかね。

(木田) そうです。そうです。

(羽田) 文部省の中でみると、国際大学協会というのはどうですか、現時点でみると情報ネットワークの重みでいうと。

(木田) もう、国際大学協会は、東大での第四回の大会をやった後、大学の先生方は、大学ということで世界の動きをみるという目をあんまり開けてくださらなかったですね。それはね、日本の先生はご専門は熱心なんです。だから、自分のご専門のことは世界中のことが見渡せる。だけでも大学というのは、学長さん腰掛けだっと思っていらっしやるのかな(笑)。だから、私学の先生の方が。僕はね、東大の学長はね、任期四年でお願いだなんて、こんな馬鹿なことはない。学長がね、大学を掌握できるのは三年かかりますよ。どんなにやっても。そして、私どもが当初国際大学協会をやって暫くの昭和四〇年代、ご

相談した時の学長さん方はですね、森戸先生も広島大学の学長一三年もおやりになった。田中先生(田中健蔵)っていう九大の学長も三期一二年おやりになった。北大の杉野目先生(杉野目晴貞)っていうのも三期一二年おやりくださった。で、文部省が仕事する時にこういう大学を、自分の大学だけじゃなくて、国内の大学を知り尽くした先生がいらっしやると、相談ができるんです。ところがねー、四年ではやっ自分の大学が分かるだけで、よその大学がどうだってことは分からない。大学の相談ができないですよ。今、国立大学は。だから、大学の相談ができる人は私学。私学の先生の方が、そのトータルに長く、そして、まあ収入のこともあるし、言も敏感ですからね。これは本当に僕残念だと思っんです。現実はそうなってますね。国立大学はだんだん影が薄くなっています。

(羽田) 国際大学協会と日本の大学との関係は切れているんでしょうか。

(木田) まだね、国際大学協会つてのは、財団としては残ってる。組織委員会を私が担当する時に、財団を作った。金集めんにかいかんで、それは残ってます。そして、東大の総長なり、ひと頃は慶応の先生が、日本の代表で理事になって入ってらした。で、国際大学協会そのものは、世界の会議をやりますから、私も何年だったかな、ポストを離れてから、フィリピンのマニラの会議にいっぺんくっついて行きました。加藤一郎さんなんか、来い来いって。で、それからもう一度は、ヘルシンキでやった大学にくっついて行きました。で、その時に、あー、日本はだめだなーと思った。国際大学協会には、日本の学長さ

んをかなり入れてあるわけですよ。ところがね、それは、海外出張の手当てで総会に出て来るんでね。一週間、居ないんだよ(笑)。それで、僕は東大の森先生(森亘)をね、なんとかヘルシンキで、世界の会長にしたいと思った。いろいろやっただけだね。だめですよ。投票の時に居なくなっちゃうから(笑)。投票は一番最後にやるんでね。みんな、「あつ、すいませんが、ちょっと予定が立ってしまってるもんですから」とかってね。世界の学長会議に出てくるのをいい出張の口実にして出てこられるから、国際大学協会っていう国際組織にparticipateするっていう意識がまずない。残念ですね。だから、ましてや自分の大学を国際的にどうするっていう意識もない。これはまあ、私が、実体験している正直なところですから。だけど、森先生は、今は会長をやってらっしゃるんじゃないかな。あるいはもうお譲りになったかもしらんが(森亘は、一九九五年二月のインドでのIAU総会においてIAU会長に選出され、二〇〇〇年八月の南アフリカでのIAU総会まで五年間IAU会長を務めた)。私はフィンランドで一生懸命になって、人を連れて行ってね。で、森さんはアジアから出ている理事だから、これを会長にしようって工作したんだけど、最後の投票で負けました(笑)。

(羽田) ありがとうございます。

(木田) いやー、あのフィンランドの大学ってのはね、すごいもんだなって思った。ちょうど行った時にね、フィンランドの何っていう大学だったかな。国立の一番中心の大学ですね。創立四〇〇年っていうんだよ。そうするとね、四〇〇年で皆さんお祝いをする。それぞれ

外国から来た人もね、制服を着て参加するんですよ。で、そこへ行くと日本の大学っていうのは、さっぱり制服が、まあモーニング位しかないわけだな。それぞれの大学がね、それぞれ由緒のある制服を着て、お祝いに参加して行列を作るわけね、ずーっと。はあー、すごいなーっていうのが一つ。それから大学っていうのは強いなーっていうことを。それは何故かっていったら、フィンランドはその間に何回と無く、スウェーデンにやられ、ロシアにやられ、揺れてるわけです。だけでも大学は四〇〇年のお祝いをやってるんですな。大学っていうのは、なるほど強いもんだ。そして、そのフィンランドの民族っていういますかね、国っていうものの基本を支えてる。すばらしいinstituteだなんていうふうに思いました。

(頼) ちょっと一つ先生、僕も総合科学部できて三年目に入ったんですけども。あのころもう、若いもん、学生も本気で、どうしようかっていういろんな議論を先生・教官とやっとなんで。教官の方は専門教育との一体化ということは非常に強調して言っていましたね。研究と教育の一体化。だから、僕らが、むしろ今までどちらかといえば、広高以来のといったらいいか、リベラル・アーツか分かりませんけれども、そういう授業をやっておられた先生方が、突然、自分の研究の話をされたというようなことがありましたね。だから、それはむしろ、研究・教育の一体化であって、総科のスローガンとちよつとかけ離れていたんじゃないかという気が非常に当時からしてならん。だから学生も分からないということが多かった。

(木田) 研究・教育一体化っていうのは、今でもそれはそういうこ

とおっしゃる方は強いでしょうね。だけでも現実をみてもらわないといけません。僕はやっぱり教育っていうのは、基本的にできない子どもに人並みの生活ができるようにしてあげるっていうのが、一番立派なことだと思います。それはもう盲学校や聾学校に行つて努力されてる先生方をみますとね、それが数年越しにこれだけのことができるようになる。大変なことですよ。ですから、先生方が、その底上げをして、平均を上げていく努力、これは教育の世界でできると思うんですね。

日本は数学や理科が世界一だとか、二だとかいいいます。あれも研究所(国立教育研究所)で、私も平塚先生(平塚益徳)の後を仕事さしてもらったもんですから、どうして日本の数学が点数がいいのか、ということを考えておりました。そうしたらね、各国と一緒にあって、あれ何年もかけて出題を相談しながら作るんです。事前テストをやつてこのくらいだったら、年齢層、それから、教育段階相応のスコアが出るなっていうのをやって、やりますから、決して一国だけに都合のいい試験問題でやつてるわけじゃないですね。で、日本の子どもはね、計算問題が強い。しかし、文章で書いた問題になるとね、弱い。で、計算問題で強いついていうのは何故だつて教育研究所の研究者に聞きました。すると、それは高校入試によります。高校入試はね、全員が受験しますから、とにかく受験した子どもに、「いやーだめだった、答えが書けなかった」って言わしたんじゃ、具合が悪い。そして計算問題だつたら、そこそこ鍛えていけば数字が出る。で、答えが書ける。だから、計算問題にはみんなが力を入れて、答えを出してくる。で、

それでみんな同列に並んだんじゃ選別ができないから、選別をするためにね、幾何のような、文章題を出します。そうすると、これでばさつと点差がつくんです。で、それで入試っていうのは、要領よくやるんです。だから計算問題が国際的に強くなるのは、高校入試の出題のやり方によるんですよっていうのを、教育研究所の数学の専門家が教えてくれたんだ。どうもならんなつと思つた。

で、そういうデータを持ちながら、今度スウェーデンで役員会があつて、この結果をどう評価するかつて議論があるわけですから。その時に、オランダはできがよかつたんですね。日本が一位でオランダが二位だつた。で、一位っていうのはどういうことかつて言いますとね、三〇点満点で出題をして、三〇〇クラスに、もうちょっとクラス数が多かつたかな、各国とも同じサイズで、とるんです。けども、小さい香港みたいなところがあるから、トータルなのはちよつと狭いかもしれませんが、クラスの人数、収録する子どもの数を大体、平均になるようにとりましてね、そして、点差を出していくんです。で、隣におつたスウェーデンの今、会長をやつてる君と実際のクラス毎の点を比較してみた。そうするとね、スウェーデンは二位だつていうんだけれども、単純なんじゃないんですな。三〇点満点で二五点以上のクラスがいっぱいある。ところがね、同時に一〇点以下のクラスも多いんだ。スウェーデンは。ところが日本はね、三〇点満点で一〇点以下のクラスはほとんどない。で、二〇点以上のクラスも少ないんだ。これはね、いかにも日本的ですわ。で、おい、おまえんとこどうしてこうなるんだと。どうして一〇点から二〇点のところはクラスのサイズが

みんな固まっちゃってね、零点はない。一〇点以下が少ない。上もない。で、上のところもないとは言わないが、どうして一〇点以下がないか。その時私はね、答えようがなくなつて困つたんですがね。筑波に行つた時にね、筑波の附属じゃないんですけど、あそこにある、大学と一緒になつていろんな研究やつてる小学校があるんです。で、そこいって情報化のことをいろいろやつてました。で、そのメディアを使って教育したらこういうふうな成果が上がるつてことをやつて、私どもに説明してくれた。で、それ聞いてりますとね、先生がいろいろ説明したんだが、僕は、そのメディアを喜ばない子どもがいますかつて聞いたんですよ。そしたらね、メディアよりも、私の説明を喜ぶ子が相当数います。しかし私はクラスの平均から、ちよつと下に目線を置いた言葉で喋ります。そうするとその目線のところに集まつてくる子はね、「あんな機械でこんなことするのは、だめだ。先生の話の方がいい」とこう言う。ところが、それよりもできが悪い子、それとできのよい子は先生の話がまどろっこしいわけです。だから、「そらー、先生、機械ですきなようにやつてる方がいいよ」つて、こう言うつて言うんですね。ははー、なるほど、それは日本の先生がそうかもしれないなーと思つて、その隣にいたオランダの専門家にね、「いやどうもね、何故日本がこういうふうになるかつていうのは、大体日本の学校の先生がね、子どもを指導する時に、平均よりもちよつと下を狙つてね、そしてそこをこぎ上げるような教育をしてると僕は聞いとるんだ」とこう言った。そうしたらね、「分かった。そうだろ、オランダの学校の先生は上ばかりみて教育してる。点数のいい子じゃないと相手

しない。だからこうして下にたくさんできるんだよ」つて言つてね。なるほど、そら、そうかもしらんなつて思いましたね。だけど、日本の社会全体としてみますとね、それは、下を底上げしてる努力つていうのは、非常に大事なんですよ。

で、それは、僕はアメリカに行きましてね、マーク・T・オアさんが、大学生に何故日本の教育が発展したのかフロリダに来て話をしてくれ。だからフロリダの大学に引つ張つて連れて行かれましたね。つても長く居られないから一ヶ月で勘弁しろつて言つたんです。そうしたら、行つてる間にいろんな学部から呼び出しが来て、その中の質問にですね、これは経済の方だったかな、工学関係だったかな。日本の自動車がどんどんアメリカに売れていくわけですね。私もトヨタの一番新しい自動車を貸してもらつてね。大学が自動車のキーをね、講師で行く時に貸してくれるんだ。で、おまえさんこの車に乗れつて。で、学生が、何故日本の自動車はこんないのができてね、アメリカの自動車は負けるんだと。どうして日本が強いんだと、こう言うことを言うんですよ。で、これは答えように困つちゃつてね。その時に私が期せずして、ひよつとものを読んで思いついたことがある。それはね、いや、日本人つてのは、別にそう皆さんと変わつてることないよつて。一〇人居れば一〇人足した時の力つていうのは、一〇そこそこで、そんなに日本人の方が優秀だつてことがあるとは思わない。ただね、僕は日本の社会をみるとね、一〇人のうち、日本人はみんな一なんだ。であなた方はね、〇・八があるし、一・二があるしね、大変なんだ。デコポコがある。できる人はすばらしい。足せば一〇だ、お互いに。

だけどね、社会の仕事っていうのは、足し算じゃないんだ。かけ算なんだ。かけ算で出してみろって言ったんだ。そうすつとね。日本は一人なんですよね。○・八のあるやつは低くなっちゃう。一にならない。要するに日本は、平均で一だから、あなたの方の一・二があつたり、○・七があつたりするアメリカより日本の方が若干強いんじゃないかと思うんだと。だから、どうするかっていうんだつたらね、おまえさんの方は下を上げると。低い方を。わしらの方は、みんな一じゃ困るからね。一・二とか一・五とかいうのを作らなきゃいかん。できる子を作る教育をしなきゃならん。アメリカは下を上げる努力をしたらどうかと言つてやりましたが、まあこれで答弁になったかどうかしらんですけどね。だけでも、僕はその問題があると思うんです。ですから教育つてもものは基本的に、そのでできる子だけを相手にしておれば教育だつていうんじゃないんで。ほんとは、できない者を底上げしてけるところに社会の強さっていうのが出てくると思うんですね。しかし、ノーベル賞は出てこないね、それじゃあ(笑)。だから、ノーベル賞をどうするかつてのは、人の足を引っ張らないような生活習慣をしないと具合が悪いです。日本でノーベル賞をとられた方々が、皆さんからサポートされてるとは僕は思わないですから。だからそこがね、日本のちよつと困つたとこなんだと思うんですけれどもね。どうもちよつと余計なところに脱線しましたな。

(小池) いえいえ。他にどなたかご質問いただけませんでしょうか。それでは、予定の時間を一五分過ぎてしまいました。

(木田) あーそう、過ぎた。これだね、医療費よりも教育費の方が

たくさんになるように皆さん頑張っていたかったですね(笑)。そこで僕は一つ皆さんにお願いしたいのがね、高齢者に教育費を使つたら、介護費用が減りますよ。で、それはね、どなたかが真剣に研究してくだすつてね、高齢者の介護が今非常に問題になつてゐるんですけれども、介護の代わりにね、頭を使いませよ、勉強しましよつて、そしてたら介護費用が少なくなります。是非それを実証していただきたい(笑)。そして大学はそれを実行していただきたい。高齢者もまた学生にして若返らせるようにしていただきたい。どうもいろいろと有り難うございました。

(頼) どうも先生、長時間有り難うございました。また今後ともよろしく願ひします。

(きだ ひろし・新国立劇場運営財団顧問、元文部事務次官)

本稿は、広島大学五十年史編集室主催第一一回研究会(二〇〇一年三月二九日、於広島大学事務局5F2会議室)において行われた講演を文章化したものです。戦後高等教育についての貴重な内容であり、改めて木田宏氏に感謝します。

(広島大学五十年史編集室)